

『蒙求』における日本漢音声調の伝承と衰退

佐々木 勇

一、本稿の目的

日本語の和語アクセントには、南北朝期ころに一つの大きな変化があったことが明らかになっている。⁽¹⁾この変化は、「南北朝時代以後間もなく応永年間に」、仏教の論議書・真言宗の表白の漢語アクセントに及び、十五世紀半ばに完了したとされている。⁽²⁾

一方、南北朝期以降、漢籍・仏典の読書音・読誦音の声調がどのようなであったのかについては、いまだ十分な調査が行なわれていない。⁽³⁾

そこで、本稿では、日本漢音声調の実態を時代を追って把握することを目的とする。

対象資料として、『蒙求』字音点を選ぶ。『蒙求』を選んだのは、

①時代の異なる加點資料が比較的多く存すること、②各時代を通じて広く読まれていたこと、③呉音の混入が比較的少ないこと、④日本漢音の代表的資料として研究の蓄積があること、の理由による。

二、『蒙求』諸本の字音点の概観

まず、現時点で調査し得た字音点本を加點年代順に並べてみると、次頁の表一のようになる。⁽⁴⁾

表一から、一四九〇年頃までは声点加點資料が連続して見られるが、それ以降は希になることが知られる。

室町末期以降で過半数の声点加點がある資料21・24・36・37は、仮名字体・雁点の位置・疊符の位置などから、鎌倉時代頃の底本の移点にかかるものであると判断される。また、少数ながら声点加點のある14・17・23・38も、加點部分に偏りがあるため、声点加點部分に限って底本から移点した可能性が考えられる。

よって、室町末期以降の声点は、前代のを正確に伝えるという意図の加點には見られるが、『蒙求』学習の際には重要でなくなつたものと思われる。桃山時代加點の資料25・26は、ともに資料14（一五二四年頃点）からの移点本であるが、両本とも声点が一切加點されていないのは、移点の時点で声点の有用性が無くなつていたためであらう。

表一

番号	所蔵	加点点代	本文形態	声点	仮名	備考
1	文化庁	平安中期	標題本	○	△	1の別点で、その朱点を補えるもの
2	文化庁	1134年	標題本	△	○	
3	中華民国国立故宮博物院	12世紀	古注本	○	△	
4	国立国会図書館	鎌倉初期	蒙求和歌	○	△	移点途中のもの
5	正倉院聖語藏	鎌倉中期	標題本	×	○	
6	岩崎文庫	鎌倉後期	標題本	○	○	
7	天理大学附属天理図書館	1320年頃	標題本	○	○	巻上には声点まれ 移点本 巻上には声点なし
8	天理大学附属天理図書館	1345年	標題本	○	○	
9	真福寺	南北朝期	古注本	○	△	
10	大東急記念文庫	1374年頃	増注本	○	○	巻中にのみ声点あり
11	国立国会図書館	1400年頃	増注本	○	○	
12	天理大学附属天理図書館	1490年	増広本	○	△	
13	竜谷大学図書館	室町中期	標題本	○	○	底本は鎌倉期か
14	京都大学附属図書館	1524年頃	徐注本	△	△	
15	国立国会図書館	1525年	増広本	×	△	
16	東京大学総合図書館	1537年	増広本	×	○	巻中と巻下の一部にのみ声点あり 底本は鎌倉期か 14番の移点本 14番と類似の奥書を有する
17	京都大学附属図書館	室町末期	徐注本	△	△	
18	成實堂文庫	室町末期	増広本	×	△	
19	身延文庫	室町末期	増広本	×	△	底本は鎌倉期か
20	尊経閣文庫	室町末期	増注本	×	△	
21	京都大学附属図書館	1580年頃	増広本	○	△	
22	京都大学附属図書館	1585年	徐注本	×	△	巻中と巻下の一部にのみ声点あり 底本は鎌倉期か 14番の移点本 14番と類似の奥書を有する
23	高野山寶壽院	桃山時代	徐注本	△	△	
24	内閣文庫	桃山時代	増広本	○	△	
25	天理大学附属天理図書館	桃山時代	徐注本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
26	大東急記念文庫	桃山時代	徐注本	×	△	
27	中華民国国立故宮博物院	桃山時代	徐注本	×	△	
28	中華民国国立故宮博物院	桃山時代	増広本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
29	斯道文庫	桃山時代	増広本	×	△	
30	岩崎文庫	桃山時代	増広本	×	△	
31	大東急記念文庫	桃山時代	増広本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
32	米沢市立米沢図書館	桃山時代	増広本	×	△	
33	大東急記念文庫	桃山時代	増注本	×	○	
34	尊経閣文庫	桃山時代	徐注本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
35	大東急記念文庫	1596年頃	徐注本	×	△	
36	国立国語研究所	江戸初期	徐注本	○	○	
37	陽明文庫	江戸初期	徐注本	○	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
38	内閣文庫	江戸初期	増広本	△	△	
39	香川大学附属図書館	江戸初期	徐注本	×	△	
40	東京大学国語研究室	江戸初期	増広本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
41	米沢市立米沢図書館	江戸初期	徐注本	×	△	
42	竜門文庫	1630年頃	徐注本	×	△	
43	内閣文庫	1649年頃	徐注本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
44	内閣文庫	1654年頃	徐注本	×	△	
45	東京大学総合図書館	1741年頃	徐注本	×	△	
46	東京大学総合図書館	1741年頃	徐注本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
47	金城学院大学図書館	1750年頃	徐注本	×	△	
48	東京大学総合図書館	1767年頃	徐注本	×	△	
49	金城学院大学図書館	1800年頃	徐注本	×	△	底本は鎌倉期か 底本は鎌倉期か 巻下の冒頭にのみ声点あり
50	静嘉堂文庫	1800年頃	亀田本	×	△	

○ 過半数の加点点
△ 半数以下の加点点
× 加点点無し(濁声点・不濁点のみの場合を含む)

三、『蒙求』字音点本の声調の実態

次に、伝統的な日本漢音声調がどのように失われるのかを見るために、諸本の声点から知られる声調を整理してみたい。

1. 対象資料略説

分析に耐えうる声点加点数を持つ文献として、資料番号1・3・4・6・7・8・9・10・11・12・13・14・17・21・23・24・36を選ぶ。⁽⁵⁾

左にそれぞれの資料について簡単に解説する。

1 長承奥書本平安中期（天暦へ九四七〜九五七年頃）点

本文は、標題本。長承三年（一一三四）の奥書を持ち、長承本とも言われる本書は、現存最古の『蒙求』の写本であり、その本文に加点された字音点も最古のものである。

〈奥書〉長承三年（一一三四）十二月廿七日（花押）／僧琳兌之本也

3 中華民国国立故宫博物院蔵本（子部類書天一・一七九）十二世紀後半期点

本文は、古注本（第一句〜第三〇二句分を残すのみ）。十二世紀後半頃書写加点。前半しか残っていないが、長承奥書本と他の諸本の間の実態を知ることができる点で貴重である。

4 国立国会図書館蔵本『蒙求和歌』（Waisō）鎌倉初期点

『蒙求和歌』は、『蒙求』の説話を前文とする歌物語形式の歌集である。源光行著、元久元年（一二〇四）成立で、国会図書館本

は、成立後間もない写本である。『蒙求』の標題中二五九句を掲げ、それに声点・仮名が本文と同筆で付されている。標題は、古注本から採っていることが明らかにされている。⁽⁶⁾

6 岩崎文庫蔵本（貴一〇一〇〇）鎌倉後期朱点

本文は、標題本。鎌倉後期の書写・加点と見られる。全巻に朱声点と墨仮名とが加点されている。軽点の位置は高く、明らかな區別意識を反映している。この本の声調については、かつて述べたことがある。⁽⁷⁾

7 天理大学附属天理図書館蔵本（282.2141）一一二〇年頃墨点

本文は、標題本。多数の反切書き入りが存する。書写者道順（一二六九—一三二一年）は、醍醐寺座主を務めた僧侶である。⁽⁸⁾

〈奥書〉本云建永元年（一一三二）年者／聖主嗣宝曆之第八年微臣侍御讀之第三年也今奉授此／書改新写此本以先親傳我之訓今日及授 君之説抑／又藤黄門者累代師於 天子自昔親／於我家借其証本重所見合也為我後傳此本之者努々／勿許勿許他見而已／翰林主人菅在判／建保六年十月以嚴親御本書写畢／同写点了／以累代之証本書写点交畢 道順

8 天理大学附属天理図書館蔵本（282.2143）康永四年（一一四五）点

本文は、標題本。全巻に墨声点・朱声点と墨仮名とがある。校合の跡が多く、一字に複数の声点をつけた例が多い。

〈奥書〉康永四年五月九日書写之訖／貞和元年十二月廿七日以秘本一校畢／同廿八日鑽仰了／貞和二年太族廿一日授駒一磨既／訖／直範

9 真福寺蔵本（第六十六合）南北朝期墨点

本文は、古注本（第四〇七句〜第五七六句分を残すのみ）。標題

部分には、南北朝期の声点・仮名が加えられている。

10 大東急記念文庫蔵本（一〇七・三八・四）応安七年（一三七四）頃
朱点

本文は、増注本（中・下二冊。上欠）。標題部分には、刊行時と同時期の朱の声点および仮名が加えられている。

〈刊記〉龍歳甲丙年 日 孟榮拜題謹置誌之

11 国立国会図書館蔵本（WA 9-63）一四〇〇年頃点

10の後印本。標題部分には、刊行時からさほど降らない時期の朱・墨の声点および仮名が加えられている。

〈刊記〉龍歳甲丙年 日 孟榮拜題謹置誌之（ただし、後印）

12 天理大学附属図書館蔵本（383・215）一四九〇年点

本文は増広本。奥書の延徳二年（一四九〇）の加点と見られる。

声点は、中・下巻には全体的に見られるが、上巻では冒頭にしか加点されていない。

〈奥書〉延徳二庚戌秋九月稔四日加校／大中臣能方闕畢

13 龍谷大学図書館蔵本（021・408-1）室町中期点

本文は標題本。室町中期の書写・加点と見られる。ただし、声点の位置に曖昧なものが多く、仮名の誤写もあるため、字音点は移点によると思われる。

14 京都大学附属図書館蔵本（清家5-25モ2）一五二四年頃墨点

本文は徐注本。上巻には仮名の音注はあるが声点は無い。中・下巻は、声点・仮名ともに詳しい加点がされている。

〈奥書〉史記前後漢書已下以本書校正之同又加首書訖／侍従三位清原宣賢／依三福寺長老裕翁發起每日講之此卷自十月二日始至同十八日／終（但此内四ヶ日闕）／時大永四年（一五二四）侍従

三位清原宣賢

（〈内は割書。以下同。〉）

（別）享祿二年（一五二九）於能州畠山左衛門佐義總亭講之（始六月廿七日終七月十八日十三ヶ度）（以上、上巻）

享祿二年（一五二九）七月於能州畠山左金吾義總亭／講之（始十九日終八月朔十一ヶ度）環翠軒宗尤／天文十一年（一五四二）於私宅講之（以上、中巻）

享祿三年（一五三〇）三月於能州畠山左金吾義總亭講去／年下向之時下巻不及講之上洛依結約當年／亦北征終此巻（始十六日終廿二日十二ヶ度）環翠軒宗尤／天文十四年（一五四五）四月十四日於越州一乗谷慶隆院講始之六月十四日／講終三十七度全部相終宗尤（以上、下巻）

15 京都大学附属図書館蔵本（清家5-25モ2）室町末期墨点

徐注本。仮名による音注は全巻に亘ってみられるが、声点の中巻のみに加点されている。

21 京都大学附属図書館蔵本（清家5-25モ1）一五八〇年頃墨点

増広本。巻頭から中巻前半までとそれ以降とは、別筆による加点である。前半には、古体の仮名が見られる。声点は、この前半にのみ存する。

〈奥書〉時天正第八（金竜）上章撰提格夏之孟月之仲上瀬／九梅左拙書之／愛甲中務少輔長廉（以上、上巻）

愛甲中務少輔長廉／時天正第八曆上章撰提格夏之孟月之落上瀬日／巢松軒九梅左書之（以上、中巻）

愛甲中務少輔長廉／時天正第八曆（金竜）撰提格黄梅家中之（中巻）九梅左拙一筆書之（以上、下巻）

23 高野山寶壽院蔵本（特外典部二十七函十五冊）桃山時代朱点

徐注本。仮名による音注は全巻に亘ってみられるが、声点は部分的に集中して加添されている。

24内閣文庫蔵本（子二二2）桃山時代朱点

増広本。鎌倉期頃の底本からの移点本。全巻に亘って声点・仮名による詳しい音注が見られる。

36国立国語研究所蔵本（w921M016）江戸初期朱点

徐注本。洪月宗玩（一五七四—一六四三）旧蔵。底本は鎌倉期頃か。全巻に亘って声点・仮名による詳しい音注が存する。

2. 諸本の比較

比較のため、各資料の標題部分の声点加添例を『廣韻』の体系で整理する。

整理の結果を表にすると、それぞれ表1・表2（後掲）のようになる。表中、『廣韻』の同一声調清濁のうち、声点加添数最多の欄に網掛けをした。（資料1平安中期点については、既に発表している^{（9）}ので、表を掲げることを省略する。）

右の十七本の実態を通覧すると、次の点を指摘できる。

- ① 大部分が日本漢音の声調体系に一致している。
- ② ただし、時代が降ると共に輕声が減少し、消滅する。
- ③ 上声全濁字の去声化の割合が資料によって異なる。

次に、右の①②③について、若干述べたい。

① 日本漢音の声調体系

ここである日本漢音の声調体系とは、その中心をなす六声体系を

指す。六声体系は、中国中古音（いま『廣韻』で代表させる）に次のように対応するものであることが明らかにされている。

『廣韻』平声の全濁・次濁 — 平声（重）

『廣韻』平声の全清・次清 — 平声輕

『廣韻』上声の全清・次清・次濁 — 上声

『廣韻』上声の全濁 — 上声・去声

『廣韻』去声 — 去声

『廣韻』入声の全清・次清・次濁 — 入声輕

『廣韻』入声の全濁 — 入声（重）

『蒙求』においては、これが大きく乱れることはなく、声点が加添される限りは、伝統的な声調を示そうとしているということである。

② 輕声の消滅

ただし、日本漢音で平声輕になるのが原則の『廣韻』平声全清・次清字が平声になる例は、資料1にすでに見られ、資料3（表1）で増加している。

また、入声輕と入声との区別は、日本語の生得話者にとつて難しいものであり、資料1においてすでに原則からはずれる例が比較的多く見られる。

その後、時代が降ると共に、輕声は減少していく。

資料2（一四九〇年点）では、平声輕は無い。入声輕は四例のみであり、いずれも高く終わる声調である上声・去声の後に出現している。

資料3で輕声が多いのは、底本の輕声を残したためと考えられる。

本資料には、前代の他本で平声軽・入声軽が加点されている字にそれぞれ上声点・去声点を加点している例があり、移点者は、軽声を理解していなかったのではないかと疑われる。

資料14(一五二四年頃点)では、軽声が全く見られない。こゝで、声点は、平・上・去・入の四声を示すだけのものになっている。つづく資料15にも軽声は無い。資料16に軽声が加点されるのは、移点本であるためであろう。次の資料18には軽声が無い。24・36は移点本であるが、軽声はごくわずかである。

右のことから、『蒙求』字音点本における軽声は、前代の声点の移点によって表われることはあつても、十五世紀末には声調として消滅したと考えられる。

③上声全濁字の去声化の割合

上声全濁字の去声化の割合によつて、右の『蒙求』諸本は次の三つに分けられる。資料数の多い順に並べる。

a 去声の数が多いもの

資料3・5・8・9・10・11

・12・17・21・23

b 上声と去声とが同程度のもの

資料1・6・7・14・24・36

c 上声の数が多いもの

資料13

右の通り、a 去声の数が多いものもつとも多い。

b 上声と去声とが同程度のものに資料1平安中期点が属していることから、これが『蒙求』読誦の古い声調の一つであることがわかる。しかし、資料6は、事情が異なる。資料6には、一音節去声字の上声化という別の要因が働いている¹⁰。また、資料7は、反切の影響で上声と去声とが同程度となつてゐるという指摘がある¹⁰。資料14

は、上声全濁の当該字に上声・去声の両点を付した例が多い。この資料にも、反切の書き込みがある。資料24・36にも、反切注が見られる。よつて、資料7・14・24・36は、反切学習によつて『廣韻』上声全濁字の声調を上声にとどめたものと考えられる。

なお、cに唯一属する資料13は、わずかに見られる去声点加例も当該字が去声をもつ例がほとんどであつて、すべて『切韻』系韻書を見ながら加点されたものと思われる¹²。

四、『蒙求』学習法の変化と声調

このような声調伝承の途絶には、『蒙求』の学習法の変化が関わつてゐると思われる。

『蒙求』は、四字一句の標題が韻を踏んでいるため、標題を漢字音で直読するのが古くは一般的であつた。『宝物集』の「勸学院ノスハメ(雀)ハ蒙求ヲサヘツリ(轉)……」(書寮部藏本、119行目)という言葉が生まれたのもそのためである。鎌倉時代の五山僧義堂の『空華集』にも「聴取藏童兒誦蒙求」(『五山文学全集』に依る)と見える。現存する字音点資料に、鎌倉時代以前書写の資料に標題本が多い(表一参照)のもこのためであろう¹³。

しかし、標題本の現存資料は、南北朝期のはじめで途切れてゐる。その後は、古注本より注の詳しい「増広本(附音増広古注蒙求)」¹⁴「増注本(重新点校附音増注蒙求)」¹⁵によつて、講義・講読をすることが多くなり、よりいっそう注が詳しい「徐注本」の伝来以来、これが大いに流行して、江戸時代になると、『蒙求』といえは徐注本といった状態になつたらしい¹⁶。

徐注本を用いたことが知られる記事の最古は、『実隆公記』の次のものである（『続群書類従』本に依る）。徐注本は、注が詳しいために「補注蒙求」とも呼ばれた。

廿日へ辛亥、晴、天氣快然也、今日蒙求講釈事、依兼日約普少納言章長朝臣來臨、以補注講之、表並序二至蒙求乳虎講之、其所作神妙也、

（『実隆公記』永正元年（一五〇四）閏三月）

この日は、蒙求の標題第十二句「蒙求乳虎」までを「講釈」して終わっている（『蒙求』は、全五九六句から成る）。

この日から、間をおきながらも『蒙求』の「講釈」は続き、一年あまり後の翌年四月廿七日に四十四日目の講釈をもつて、喜びとともに全巻を読み終えている。

廿七日へ壬午、雨降、蒙求講釈、今日終功、尤大慶也（以下略）。

（『実隆公記』永正二年四月）

この度取り上げた字音点本の中で、『京都大学図書館蔵本（一五二四年頃点）』の奥書からも、相当の日数をかけて読んでいたことが確認できる。これは、注の解釈に時間を割いたためと考えられる（¹⁶）。

なお、『実隆公記』には、『蒙求』の書名がしばしば見られる。それらは、『蒙求講釈』『蒙求講談』『講蒙求』としてあらわれ、

「蒙求講」という用語も存する（「今日蒙求講、人々来帥方」享禄二年五月十九日）。しかし、『法華経』『最勝王経』などのように「読誦」する記事は見られない。

『蒙求』の標題を漢字音で直読することが無くなったのかどうかは不明であるが、学習の比重が注文の理解に移っていったことは確かであろう。そもそも、より詳しい注文を持つ本が伝えられ、広まること自体、注を重視していたことを示している（¹⁷）。

五、結論

日本漢音声調の実態を時代を追って把握することを目的として、『蒙求』字音点本を対象に検討してきた。

結論は、次のようになる。

A. 『蒙求』においては、十六世紀はじめには、伝統的な日本漢音声調の伝承が困難になった。

資料①（一四九〇年点）以降、声点が加えられる部分に偏りが見られる資料がある。これも声点の必要性の低下を示すものである。B. 『蒙求』においては、声点加点がなくなる直前まで単字の伝統的な漢音声調を保とうとした。

ただし、軽声は十五世紀末には消滅した。また、韻書で上声所属でありながら、去声として伝えられることのあった上声全濁字の声調の伝承も困難で、韻書に依って加えられることがあった。

右の結論は、『蒙求』に限ってのものである。他の資料では状況が異なるものがある（¹⁸）。それらの調査は、今後の課題としたい。

注

（1）金田一春彦『国語アクセントの史的研究』（一九七四年、塙書房）、大野晋「仮名遣の起源について」（『国語と国文学』一九五〇年十二月）など参照。

（2）桜井茂治「「出合」考——アクセント史的考察——」（『國學院大學国語研究』第七号、一九五七年十二月）、同「アクセシ

ト史資料としての「声明」(Ⅰ) — 真言宗所伝の「表白」を中心として — (「国語学」第四四・四五集、一九六一年三・六月)、同「アクセント体系変化の時期について(上)(下) — 「名義抄」から「補忘記」へ — (「国語と国文学」三九・九・十一、一九六二年九・十一月) 参照。

(3) 柏谷嘉弘「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(「国語学」六一、一九六五年六月)は、次の資料を比較し、時代が降るとともに中国中古音とのずれが大きくなることを指摘している。

『史記』孝文本紀延久五年(一〇七三)点

『白氏文集』卷第三・四天永四年(一一一三)点

『文鏡秘府論』保延四年(一一三八)点

『春秋経伝集解』保延五年(一一三九)点

『遊仙窟』康永三年(一一三四)写点

(4) 早川光三郎「蒙求諸本考(その一) (その二) (その三)」

(「滋賀大学教育学部紀要」人文科学・社会科学・教育科学

第十六・十七・十八号、一九六六・一九六七・一九六八年)、

池田利夫編『蒙求古註集成 上巻・中巻・下巻・別巻』(一九八八・一九九〇年、汲古書院)、築島裕編『長承本 蒙求』

(一九九〇年、汲古書院)などを参考に調査した。また、各期の年代を室町初期(一一三九四・一四四四)・室町中期(一四四五・一四九二)・室町末期(一四九三・一五七〇)・桃山時代

(一五七一・一六一五)・江戸初期(一六一六・一六八二)とした。『蒙求』諸本は早川論文の名称に依り、「古注本」「標

題本」「増広本(附音増広古注蒙求)」「増注本(重新点校附音増注蒙求)」「徐注本」とした。なお、江戸期以降は極めて

多くの現存本があるが、声点の加点は原則として見られないので、若干例を記すにとどめた。

(5) 1は築島裕編『長承本 蒙求』、2は斯道文庫蔵マイクロフィルムに依る。その他は、原本調査に依る。

(6) 早川光三郎「古蒙求探求ノート」(「滋賀大学文学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学」第8号、一九五八年十二月)参照。

(7) 佐々木勇「日本漢音に於ける声調変化 — 岩崎文庫本『蒙求』を中心に — (「新大國語」第十四号、一九八八年三月) 参照。

(8) 佐々木勇「『蒙求』字音点に見られる日本漢音の変遷 — 鎌倉時代を中心として — (「国文学攷」第二二二号、一九八九年三月) 参照。

(9) なお、資料1は、八箇所の声点加箇所を認定できる。これが八声体系を示しているのではないかと、推定したことがある(佐々木勇「長承本『蒙求』平安中期点の声調体系」へ「国語学」第一六八集、一九九二年三月)。これに対し、KOMATSU Hideo [Sino-Japanese Systems in Use] (FACTA ASIATICA 65, 1993-8 後、小松英雄「日本字音の諸体系 — 読誦音整備の目的を中心に —」として、築島裕編『日本漢字音史論輯』へ汲古書院、一九九五年に所収)の批判があった。さらに、考えたい。

(10) 注(7)論文、参照。

(11) 沼本克明「読誦漢音に於ける学習音の介入 — 蒙求字音点の場合 — (「鎌倉時代語研究」第十輯) 参照。

(12) このような加点の類例として、高山寺蔵『理趣經』正保四年(一六四七)点・日相本『法華經』が指摘されている(注二論

文)。

(13) ただし、古注本が伝わっていることから知られるとおり、有注本が全く読まれなかったわけではない。勸学院の雀は蒙求を轉(うつ)るといふ言葉(ことば)を記した『宝物集』にも「(前略)ト申事孝子傳蒙求ナムト申文ニコマカニ侍メリ」(書寮部蔵本、お行目)とあり、標題を解説した注文も読まれていたことが知られる。

(14) ただし、古注本などを全く用いなくなったわけではない。

『実隆公記』(永正五年八月七日紙背文書)には、「唐本古注蒙求」を参看した記事が見られる。また、江戸時代に入っても、資料3故宮博物院本を虫損まで忠実に模写した宮内庁書陵部蔵本(『蒙求古註集成 上巻』に所収)が存することからもそれが知られる。

(15) 早川光三郎「蒙求諸本考(その二)」(『滋賀大学教育学部紀要』人文科学・社会科学・教育科学 第十七号、一九六七年)参照。その目で通覧すると、龍谷大学蔵本室町中期点は、標題本としては時期が遅い。この点でも、資料3は例外的である。(16) 『宣胤卿記』に、次のような記事がある(『史料大成』本に依る)。

禁中 たつねけるうへ木をそれとしらせぬも

ふかき道あるも、しきの庭

孔光温樹ノ心也、詳蒙求註

(永正元年へ一五〇四十月廿四日)

この歌の注は「歌の心は、『蒙求』の句「孔光温樹」のものである。詳しくは、『蒙求』の註を見よ。」という意味かと思われる。『蒙求』が当時の有識者の基本的教養であったことが

知られるとともに、その註文が重視されている様を見ることができる。

(17) それでは、その後、注文の漢語に声点が加えられるようになったかという点、現存資料で見える限り、標題に声点加点が無い資料には注文にも声点は加点されない。これは、注文の漢語には、伝えるべき漢音声調が受け継がれていなかったためである。

(18) たとえば、『蒙求』資料番号「(一五二四年頃点)」に部分的な声点加点をした清原宣賢(一四七五—一五五〇)も、『毛詩』・『尚書』などの漢籍には、全巻に亘って詳しい声点を加点している。『毛詩』・『尚書』などは、江戸時代に入ってもなお声点加点資料が存するのであり、その理由を検討する必要がある。

〈付記〉本稿は、平成七・八年度鎌倉時代語研究集会、平成八年度広島大学国語国文学会秋季研究集会での口頭発表をもとにまとめたものである。また、投稿後、委員会より、貴重なご教示を賜った。お教えを頂いた諸先生に深謝申し上げる。なお、本稿は、平成七年度新村出記念財団研究助成金、平成七・八年度文部省科学研究費補助金(奨励研究A)による成果の一部である。

(ささき いさむ、広島大学助教授)

(平成八年十二月十三日受理)

表1 3 院政後期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	126	34	138	145			1	1			1	1				
平輕	94	11	5	2									1			
上					80	25	10	58		2			1			
去	1				1		46	3	91	16	55	42			1	
入輕													35	12	7	13
入													46	10	34	21

(数字は延べの例数である。空欄は用例が無いことを示す。以下同じ。)

表2 4 『蒙求和歌』鎌倉初期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	103	20	95	92		2	2		2	3	3	4			1	
平輕	22	6	3	1					1							
上	3	2	2		67	9	6	34	4		2	2				
去	6	4	6	1	7	1	28	1	58	16	11	20				
入輕													15	5	10	4
入													31	12	21	17

表3 6 鎌倉後期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	206	50	254	273	12	3	13	6	19	4	13	7			1	
平輕	207	43	26	5	2		1		1					1		
上	19	3	3	4	153	46	56	106	54	13	30	29				
去	7		1		6	3	47	7	114	31	64	61				
入輕													112	43	71	62
入													40	5	20	12

表4 7 1320年頃点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	260	71	196	199	1		3		1		1	2			1	
平輕	29	2	7	3												
上	1			1	120	36	57	30	2	2	1	1				
去	1	1	1		3		61	4	130	32	75	53	1	1		
入輕													14	7	4	8
入					1				1				45	29	33	50

表5 8 1345年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	237	68	240	276	4		2	1	13	3	13	8				
平輕	29	30	11	8	2	1	1		1							
上	1			1	113	33	41	104	2	1	4	2				
去	31	2	26	39	1		55	6	135	50	103	91				
入輕													62	23	26	31
入													30	22	36	49

表6 9 南北朝期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	98	18	88	70												
平輕	16	4	1	3												
上					51	14	4	53								
去	1			1			25	1	52	17	27	33				
入輕													3	1	2	1
入													31	12	23	16

表7 10 1374年頃点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	400	91	272	271	1		2	4	1		2	2			1	
平輕	25	5	6	7							1					
上	1	1			165	49	26	108	6	1	2	4			1	
去	4	1	1		5	3	90	6	180	48	98	90	1	1		
入輕				1									19	2	8	5
入								1					141	42	81	73

表8 11 1400年頃点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	400	91	272	271	1		2	4	1		2	2			1	
平輕	25	5	6	7							1					
上	1	1			165	49	26	108	6	1	2	4			1	
去	4	1	1		5	3	90	6	180	48	98	90	1	1		
入輕				1									19	2	8	5
入								1					141	42	81	73

表9 12 1490年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	232	55	158	160	6		4	3	4	2	2	1				
平輕																
上			1	2	83	28	10	59	3	2		2			1	
去	1		2	1	13	4	46	6	97	28	62	60		1		
入輕													3			1
入		1					3		4		1		78	22	47	37

表 10 13 室町中期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	204	53	225	223		1		3	1			1				
平輕	177	38	38	28	2		1	2	2							
上	18	1	1	3	163	46	97	106	3	6	2					
去			3	2	1		17	1	168	42	94	87	5	2		1
入輕										1			70	29	37	19
入													70	15	46	25

表 11 14 15 24年頃点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	143	36	106	84	1				1		1					
平輕																
上	1	1		1	67	13	38	40	1	2	2	1				
去	2	1	3	1	1		40	2	88	35	44	46				
入輕																
入									1				71	23	31	35

表 12 17 京都大学図書館蔵室町末期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	49	40	50	49	2								1			1
平輕																
上		1		2	25	7	2	27		1	1	1				1
去			1		1	1	10		18	8	18	19				
入輕																
入							1						24	6	12	12

表13 21 1580年点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	197	41	185	185		1	1				1	1				
平輕	19	2	1	1												
上					76	22	12	57		2						
去			1		1	1	44	3	91	17	54	42			1	
入輕													4	1	3	3
入													28	20	36	28

表14 23 寶壽院藏桃山時代点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	92	23	69	69	1										1	
平輕																
上	2		1		45	40	9	30			3	1				
去	2		2		2		19	1	89	14	24	23				
入輕																
入							1						40	8	40	4

表15 24 内閣文庫藏桃山時代点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	426	95	278	276	1		1	5	2	1	2	2				
平輕																
上				4	171	48	54	109		7	9	7				
去	1	2	2		2	2	59	5	171	42	96	87	1			
入輕														1	1	1
入		1					1		1	1			153	45	91	73

表 1 6 3 6 国立国語研究所蔵江戸初期点

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
平	394	91	267	272	1	1	1		1	2	1	3				
平輕	17	3	7	3												
上	1			1	87	22	33	62	3	1	1	1				
去	2		1		6		46	2	108	30	60	60				
入輕													5	1	3	1
入		1							1				151	47	91	78